

# 全学共通教育の令和6年度実施に向けた研修会（FD）報告

## 大学教育基盤センター調査研究部編

今年度も、講義室での対面方式と遠隔配信方式を同時に行うハイブリッド方式で開催した。第1部では、香川大学の数理DS、DRIのアセスメントテスト、第4期全学共通教育新カリキュラムの検証、について報告があった。続く第2部では、効果的な振り返り（リフレクション）の促しについて報告があり、意見交換が行われた。第1部の参加者は83名、第2部の参加者は59名だった。

日時：令和5年12月12日（火）13:00 – 16:10

場所：教育学部321講義室及び遠隔開催（Zoom）

対象：全教員（特に令和6年度全学共通教育担当予定の教員）

### 第1部

1. 開会の挨拶
2. 香川大学の数理DSの取り組みについて
3. DRIのアセスメントテスト実施報告
4. 第4期全学共通教育新カリキュラムの検証
5. 全学共通教育にかかる事務手続きについて
6. 新教務システム・カダサポについて

### 第2部

1. 効果的な振り返り（リフレクション）の促し  
—概要と実施事例—
2. 質疑応答・意見交換

本報告は、研修会の企画・実施にあたった大学教育基盤センター調査研究部が編集を行った。なお、第1部「1. 開会の挨拶」「5. 全学共通教育にかかる事務手続きについて」「6. 新教務システム・カダサポについて」第2部「2. 質疑応答・意見交換」は、報告を割愛した。

## 第1部

### 1. 香川大学の数理・データサイエンスの取組について

高橋尚志 (大学教育基盤センター長)

昨年度報告したとおり、数理・データサイエンス・AI 教育事業において、本学はリテラシープログラム、応用基礎プログラムに採択され、四国ブロックの代表校として認定されている。四国ブロック内の高専・大学と連携は恙なく進んでおり、リテラシーレベルでの認定状況の割合は、全ブロックの中で四国ブロックが最も高い。

今年度の取組においてまず特記すべきは、本学の新たなネクストプログラムとして「危機管理学×数理・データサイエンス・AI 教育特別プログラム」の設置準備が整ったことである。これにより、リテラシーレベルの「情報リテラシー」(全学必修)、応用基礎レベルの「DRI イノベーター養成プログラム (I コース)」、その上位版の「危機管理学×数理・データサイエンス・AI 教育特別プログラム」という学びの三段階が完成し、体系的な数理・データサイエンス・AI 教育の体制が整ったことになる。もう一つ特記すべきは、可視化の仕組みとして「オープンバッジ」の導入が決まったことである。これにより、プログラムの修了生は、卒業後も認定の確認が容易にできることになる。なお、オープンバッジは数理・データサイエンス・AI 事業に限定されたものではなく、他のネクストプログラム修了者や DRI アセスメントテストの合格者にも付与される。

### 2. DRI のアセスメントテストの実施報告

藤澤修平 (大学教育基盤センター特命講師)

昨年度、R (リスクマネジメント)、I (インフォマティクス) の分野で試行実施された DRI アセスメントテストであるが、本年度は、D (デザイン思考) もテストの対象となり、本格実施を迎えることとなった。このほか、今年度から、テスト用動画コンテンツのダイジェスト版が作成され、学生がテストへの準備をしやすい環境が整ったことも特記すべきことである。アセスメントテストは、7月31日、Moodle 上のオンライン試験の形式で、学生が検定用の教室に集まるという方法で実施された。結果についていうと、1年次生の受験率は D 89.4%、R 89.0%、I 89.0%、合格率は D 48.5%、R 47.1%、I 43%であった (DRI すべてのテストで合格をした学生は 17.3%、200 名である)。次年度の新たな取組として、R に「化学物質管理」のコンテンツが追加されること、合格者にオープンバッジが付与されることが挙げられる。

### 3. 第4期全学共通改革の新カリキュラムの検証

寺尾 徹（大学教育基盤センター共通教育部長）

宮崎英一（大学教育基盤センター数理情報・遠隔教育部長）

西本佳代（大学教育基盤センター准教授）

全学共通改革は、2022年度より実施のフェーズに入っており、今年度はこの改革についての検証を進めている段階である。

まず、新たな科目区分である「学問への扉」については、アンケート調査より、「学生の知的関心を広げる」という当初の狙いは十分に達成されているといえる。しかし広がった関心が次なる学びに結びついているかどうかについてはさらなる検証が必要である。また「幅広い学び」のための仕組みを考えていく場合、文理融合にこだわる必要があるのか、また学部教育との連携をどのように考えるのか、という点も、今後議論が必要である。

次に、教員の減少と科目群の硬直化を解決するために導入された科目領域グループの仕組みに関しては、グループの話し合いから「学問への扉」への科目提供が実現していること、各科目領域がかかえる事情の情報共有が進んでいることなどから、一定の成果を得ていると言える。教員の担当科目数の平準化の端緒が開かれたが、まだ改善すべき点は多いので、継続的な取組が必要である。

続いて、オンデマンド型の授業科目、知プラe科目について。近年、知プラe科目の申請者数が爆発的に増えている。2019年の申請者は728人であったが、2022年は13299人となっている（延べ数）。原因として、知プラe科目を受講するためのハード・ソフト面の環境整備、文系理系を問わない開講科目の充実、といった改善があったことが考えられる。一方で、とりあえず登録をたくさんするという学生も増えているようであり、その科目をどうしても取りたいという強い意志を持った学生が学べない状況も生まれていると考えられる。このため個人が申請できる科目数を制限するなど、学生の希望が通りやすくなる仕組みが必要であると考えられる。以上の検証を踏まえて、今後、学生に負担をかけない、よりよい学習環境の構築を行っていく。

\* 予定されていた西本教員からの報告は、時間の都合により行われなかった。報告内容については、本紀要所収の「全学共通教育新カリキュラムの受講動向」を参照していただきたい、とのこと。

## 第2部

### 4. 効果的な振り返り（リフレクション）の促し

#### — 具体的な背景と考え方、促し方の概要 —

蝶 慎一（大学教育基盤センター准教授）

OECDの「ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」にみられるように、近年、「振り返り（リフレクション）」が注目を集めている。しかし、その取組が大学教育の場において、十分に実施されているとは言い難い。文部科学省による「全国学生調査（施行）」（令和4年度）によれば、「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される。」について、国立大学では、半数以上がネガティブな回答を示している。本学でも、約64%がネガティブな回答を示した。では、そもそも、振り返り（リフレクション）とは何だろうか。「振り返り」、「リフレクション」では経験的な学習が重視されており、その深さも重視されている。そして、単に振り返ればよいというわけではなく、批判的な振り返りも求められている。全学共通教育科目の担当教員が「振り返り」を促す際には、実際の授業で、どのように「振り返り」を促すのか、具体的にイメージ、想定することが重要である。担当授業科目における「到達目標」達成のために、「振り返り」や「リフレクション」を用いた具体的な授業デザインが求められている。

### 5. 文系科目の実践事例

岡田徹太郎（経済学部教授）

リフレクション・ペーパー（以下RPと表記）を集めはじめて25年が経過した。その経験をふまえ、リフレクションの事例を紹介する。リフレクションのスタイルは多様である。2023年度現在、担当する授業で採用しているリフレクションは、「復習」、「省察」、「予習」、「一新」、の4タイプに分けられる。すなわち、1) 学生が、終わったばかりの授業を「振り返る」:「復習」、2) 教員が、終わったばかりの授業を「振り返る」:「省察」、3) 学生が、授業が始まる前に先週の授業を「振り返る」:「予習」、4) 教員が、授業が始まる前に先週の授業を「振り返る」:「一新」、である。1) 学生による「復習」では、学生がRPを提出する。その際、サマリー（要約）&レスポンス（応答）形式で書き、学生は何を学び、どう感じたかを整理する。2) 教員による「省察」では、教員がRPを読み、授業の「組み立て」と「メリハリ」を確認する。3) 学生による「予習」では、RPを聞きながら、学生は前回授業での学修を思い出すと共に、面白みを感じ直す。4) 教員の気持ち「一新」では、教員がRPを紹介しながら学生の様子を確認し、新しい授業を始めるスタート地点を確認する。RPを紹介する際には、心理学者カール・ロジャーズの三原則を参考に、「自己一致」「無条件の肯

定的配慮」「共感的理解」を意識している。試行錯誤を繰り返しながら、リフレクションのスタイルを確立させていくことが必要である。

## 6. 理系科目の実践事例

鶴町徳昭（創造工学部教授）

全学共通科目「やってみる科学」、学部開設科目「先端マテリアル科学実験」、学部開設科目「量子力学1」の授業におけるリフレクションを紹介する。全学共通科目「やってみる科学」では、授業時間90分を前半45分、後半45分にわけ、二人の教員が担当している。一回目の登壇時に、授業外でできる実験を課題として出し、二回目の登壇時に解説するという振り返りをしている。学部開設科目「先端マテリアル科学実験」では、実験レポートを提出させ、それを添削後に返却している。添削の際、選択式のチェックコメントを用いることで評価基準を明確化している。ほとんどの学生に対して、再提出を求めている。提出、添削、再提出、再添削を繰り返すという振り返りをしている。学部開設科目「量子力学1」は、オンデマンド予習動画を用いた反転授業として設計している。対面の授業時には予習動画を踏まえ、演習問題を解かせ、解説している。毎回の授業の最後に小テストを実施し、採点し、返却するという振り返りをしている。オンデマンド予習動画を用いる前と比較し、小テストの平均点は10点程度上昇した。